
夢魔との生活

結 謳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢魔との生活

【Nコード】

N0832C

【作者名】

結謳

【あらすじ】

わけあり十五歳の貴崎^{たかさき}穎^{りょう}が繰り広げる、笑いあり！涙あり（？）のコメディー！／同一作者の『死神のKISS』と世界観をリンクさせておりますので、そちらのほうもどうぞ

Re - day 1 朝っぱらから元気だな

おはようございまゝす。

オレの名前は

「貴崎^{たかさき} 穎」。ヨウってよんでよあゝゝごめんなさい・・・

現在朝の五時半。

早起きなんだよね。生きるために必死で。

まあ朝早い理由はともかく、只今オレは非常に困惑中。

何故かって？

説明しよう！（古）

それはオレの腹部に女の子が寝ているから！

ともに一夜を過ごしたわけではないし、酔っ払って昨夜の様子を忘れてしまった哀れなりーマンでもない。だとしたら、何故オレの腹の上に？

真実は、本人の口から語られる・・・と思う。

「ふあああゝ。よく寝たあ。あり？」

やっと起きた。改めて顔を確認するが、結構整った顔立ちをしているようだな。

こんな可愛い娘と一緒に寝ていたと思うと、嬉しいような怖いような。

「あら？あなた・・・だれ？」

「ざっけんなあ！！いきなり布団に入ってきた分際でえ！！」

しまった。つい叫んでしまった。

でもこいつはお構いなしのようだ。

「ああ、思い出したわ。あなたが貴崎頼ね」

「・・・はい？なんで名前を？」

「一応言っておくがオレは侵入者に名乗るような真似はしてない。」

「だって私、ナイトメアだもん」

「いい病院紹介しようか」

「・・・ぐすん」

いきなり泣きだしやがった。可愛い顔して泣くなよなあ。

「つか、冗談が通じないんかな。」

「どういう事が説明しろ」

「えーっと、今日から、私はあなたの下で修業させてもらいにきました」

「はあ？なんの」

いきなり泣き止む。でもマジでないでいたのか、頬には涙の跡が。

「うーん・・・一人前の夢魔になるための修業です」

この娘、おかしいね。

「だから！なんなんだおまえは一体！そもそも夢魔でもナイトメアもなく！お前自身は何奴だ！」

「そんな事言われても・・・私は夢魔候補の一人『ネロ・レヴ・アステイリア』つています」

「いきなり名乗られても。ん？夢魔候補？何それ・・・一から説明しろ。大体、何でオレなんだ？」

するとこいつは少し顔を赤らめた。
やっぱり変な娘？

「え、え〜っと、そ、それは・・・」

「何？どしたの？」

「・・・何でもありません・・・」

「はあ。まあいいや。で、いくつか質問をさせろ。いいな夢魔」

「えっと、夢魔って言うのは私たちの職種みたいなものです。ネロとお呼びください」

「じゃあネロ。修行の内容を教えろ。オレには知る権利はあるだろう」

「そうですねえ・・・」

言って、腕を組んで考え込む。

少し難しい顔をする。そんな顔もどこか綺麗・・・

おうっと。危ない危ない。オレは危険思想たつぷりの女の子が好みてわけじゃないぞ？

「課題には『炊事・洗濯・掃除・ご近所付き合い・パートか内職・タイムサービス制圧』え〜っと、あとはあ〜」

「おい。ちよっとまでネロ。今の内容についてなんだが・・・」

「はい？なんでしよう」

「それって・・・花嫁修業か？って言うより主婦業？」

「は、はは花嫁だなんてそんな！わ、私が、花嫁・・・」

「おい大丈夫か？落ち着けよ」

「す、すいません」

おいおいおいおい。夢魔って言うのは主婦と同意か？

炊事・洗濯・掃除でもう主婦業確定なのに、ご近所付き合いにパート・

「じゃあオレがお前になにをすりゃいいんだよ」

そういつて、かばんらしきものから封筒を取り出す。

中を出すと、まず目に入っただのは……

「えつと、はい。本当はそうなんですけど、最初に会いに来たとき、頼さんいなかったんですよ。それで、そのまま……」

「忘れてたといったら貴様は永久の眠りに……」

・ ・ ・ 少し強く言い過ぎたかな？

[illegible]

「わ、わかったから落ち着いてくれ。た、頼むから」

「す、すいません。本当に、うぐっ」

「わかった。OK！ここで修行したいんだっただな？わかった。オレにできることなら、なんでもいってくれ」

「うっ、う、うぐ？い、いいんですか？」

「書類を見たところ、生活費等はオレの分まで負担してくれるみたいだし、家事も分担できるし、文句なしだ！いくらでも修行してけ！」

「本当ですか？」

そんな泣き顔で頼まれて断れるほどオレには度胸がないのかな。

「本当だ。それに、ネロみたいな可愛い娘と一緒に暮らせるのは少し嬉しいし」

「へっ？そ、そそそれって、ど、どどどどういう・・・」

「おいおい。そろそろ平常心で話してくれ。じゃないと読者に悪いだろ」

「はあ」

わかってないな、こいつ。

やれやれ。まあなんかやらせてみるかな。

「じゃあ、まずは・・・そうだな。料理はできるか？」

「はい！家事に部類されるものは成績トップです！でもその前に・・・」

「その前に？」

「契約してください。私と。別にたいしたことじゃありませんよ」

契約、だなんて聞いてないが・・・
まあ書面にサインくらいならいつか。

「何をするんだ？何かにサイン？」

「いえ。すぐ終わります。でも、嫌がらないでくださいよ？」

「何を？」

返事は無かった。でも、返事に相当する反応はあった。
反応、というより、実践だな。

「ん．．．んん！？」

「．．．．はあ。終わりました。契約成立です」

「．．．．な、な、なにを、した？」

「平常心で話さないと読者が困るんでは？」

「それはそうだが．．．お前、今何をした？」

「契約です」

本当にすぐにおわった。だが．．．

「い、今お前．．．キスしなかったか？」

「はい。それが契約方法でしたから。何か問題でも？」

「．．．．り．．．．じゃ．．．．」

「はい？」

「大有りじゃボケエー！！」

「うにゃにゃ？」

オレの初めては、出会って五分の美少女に奪われた。
あ、こいつに朝飯作らせないと。

Re - day 1 朝っぱらから元気だな（後書き）

よんでくれてありがとう！

主人公（仮）の類^{ヨウ}だ。名乗るとき意外はカタカナ表記にするからが
んばって覚えてくれるとありがたいな。

実はこの作品、同じ作者が書いている『死神のKISS』と同じ世
界観＋同じ時代・年代＋隣町、という設定だ。
ちよくちよくリンクさせるらしいぜ。

どちらか片方だけ読んでくれても十分嬉しいが、少しすればつなが
ってくるのでそれを楽しみにしておいてほしい。

じゃ。また次回。

Re-day2 タイムサービスといいつつ一日中安い店あるよね

・・・もうこんな時間か。

どもども。ヨウですわ。

現在朝七時。学校に行く時間っす。

いつもは忙しいのだが、今日はゆったりできた。

それもそのはず。

なんせ今日から、うちに住み込み家事手伝い（仮）がいるからだ。
噂をすればとやらの皿洗いを終えた家事手伝いがやってきた。

「食器洗い、完了致しました！」

「ご苦労。じゃ、そろそろ学校いつてくるわ」

「はい。何時にお帰りになられますか？」

その声は、少し小さかったような。

淋しいのかな。

「今日は始業式で、午後に終る。昼は家で食うから」

「わかりました！何かやっておくことはありますか？」

「いや、いい。帰ったら家事の説明をする。だからおとなしくテレビでタモさんみてな」

「あゝ、みのさんは？」

「・・・みていいぞ」

「はいっ！いつてらっしゃいませ！」

「おう」

なんということだ。

後々考えると少し新婚っぽいやりとりだ。な、なんか複雑だな。
そんなことを考えてたら、いつもの声が聞こえてくる。

「おはようっ、ヨウ」

「おう。おひさ」

走ってきたのは幼馴染みの『静嵐院 愛惟』
ながったるい名字はお決まりの『お嬢様』。

全く持つてその通りで、某有名電化製品会社の社長令嬢なのだ。
オレとのつながりかというと、父の仕事の都合で家族ぐるみの付き
合いをしている。

何故そんなすごい人とつながりがあるか、は親父の仕事に理由があ
るんだ。

それは親父が帰ってきたら話すよ。

「一昨日は楽しかったね。またやろうよ」

「ん？それはテニス・卓球・バドミントンのどれだ？」

「全部！」

満面の笑みでいいやがる。

ちくしょう、断りきれねえ・・・

というのは、愛惟のスポーツ相手のことある。

一昨日は二人で色々やったのだ。冬休みだしな。

まあ愛惟はお嬢様なだけあって英才教育バッチリで、運動神経がす
ごい。

だがオレも負けてないぜ。

学校にある運動部を暇潰しに道場破りし、全スポーツでストレート
勝した男だからな。

例えば・・・野球なら投手で四番を打ち取り、サッカーなら部員全
員を一对一で抜き、テニスや卓球なら部長や他のレギュラーを右手
で一点も落とさず殲滅、バドミントンは二対一で圧勝、バスケットはフ
リースロー対決でノーミス。

他にも、柔道、合気道、ボクシング、等。

ま、多趣味に損はないな。

でもそんなオレですら愛惟相手には何点か落としてしまう。

つまり一点も取れずにはかなく散った運動部よりは強いといえるな。

「今日は部活ないよね」

「ああ、ないぞ。来週からだ」

俺たちが在席する部活についてはちゃんと説明する予定だ。
むしろ早く出したい（作者談）くらいだからな。

「もう少しで中等部とお別れだね」

「そーなるなあ。でもあんましかわらないっしょ」

オレらが通う『エストウディアンテ・メサイア』学園は、小・中・高・大、で全部通える。

学力によつては数年に一人程度に飛び級もある。

実際オレと愛惟は誘いがあつたが、まわりが年上だと気が滅入るからパスした。

「この時期は毎年一人転入生が来る年らしいな」

「一人？」

「そ。一人。教師側もいじってるわけではないが、転入テストに受かるのが一人らしい。人数ではなく点数で合格ライン引いてるのに」
「へえ」

そんな話をしていると、送迎バスがくるバス停に着く。

「今年も一人かな？」

「そうなると七不思議継続だな」

設定上、この学園にも七不思議があるらしい（作者談）

バス発車時刻の七時半。

いつもの席に二人で座る。

勘違いするなよ。

オレらはできてるわけちゃうからな。

「転入生うちのクラスかなあ。楽しみ〜」

なんていいながら笑ってる愛惟は確かに可愛い。

中等部ナンバー1の称号は伊達じゃない。

でも愛惟には付き合えない理由がある。

中盤には問題になるだろう（作者談）

どうこう思案しているうちに学園に着く。

「うーす」

「おはよ〜」

「おはよう！お前等ホント仲良いなあ！」

校門にたつて皆に挨拶している竹刀をもった『シエル・アルバーン』は、この学園の列記とした教師。

飾りに竹刀をもっているのではない。

この人は学園内最強で、オレも引き分けたことしかない。

いつも会ったび仲良いだのなんだのいわれ、片方しか居ないとそれは欠席届けに値するほど。

「その台詞には耳タコつすよ。通って二年、毎日言われてんだから」

「何いつてるんですか先生、今更ですよ〜」

と、オレらの答え方はほぼこのパターン。

実はこの先生、この学園を飛んで卒業しており、年齢はというと18才と激若い。

それに加えてかなりの美人なので、中等部から大学院まで幅広く人気がある。

「今日は式があるから早く行きなさい。生徒会会長さん」

会長さん、というのは一応オレ。

ちなみに愛惟は副会長。

実はオレら二人は最年少でこの地位にいる。

選挙で票を入れてくれた人に理由を聞くと『飛びの誘いくるほどすごいんだろ?』とみな疑問形。

そしてシエル先生も会長経験者。

この学園内で飛びは強いらしい。

などと説明しつつ、歩を進めていたオレらは生徒会会議室につく。会議の文字はいらん気がするが、伝統らしい。

式といっても校内テレビ放送で、各教室に伝わる。

会長が言う台詞は決まってない。

だから今考える。

それができちゃうんだなあオレは。

なぜか?んなの知らん。

幼き頃より本という文学に触れてきたからとでもいっておこう(漫画が多数)

「えー、これより、式は始めるよ」

教頭の挨拶だ。

この学園は基本ため語。

教師達が推奨してるからもちオレもだ。

「じゃあ最初に、生徒会会長コンビにかわろうか。じゃ、お二人さん、どーぞ」

コンビ、というのは会長と副会長だ。

せっかく二人なんだから漫才的にやろうと思ったのがきっかけだ。

「はいはい、みなさんおはようございます。残念なことに昨日で冬休みは終わり。今日から学校です。ドンマイみなさん！」

明るい笑顔で最初にしゃべったのは無論愛惟だ。

昔オレと愛惟のどっちが先に映るかで生徒会の議題を三日間丸々もつてくほど重要視された問題なのだ。

では、オレの無駄な解説抜きでお楽しみください。

「でもみなさん！諦めないでください！三学期にはバレンタインデーがまっつてます！希望を持って、学校来てくださいね」

「副会長、テンション高いとこ悪いが、今年のバレンタインデーは土曜で休みだ。学校にこれんが・・・」

「それなら心配ないですよ会長！今月の生徒会の議題は『バレンタインデーを無駄にしたいくないから土曜に授業しちゃうおうよ』となっております。これは愛を捧げる乙女派女子とてない過激派男子による激しい抗争になりますね！」

「・・・オレはチョコもらっても甘い飽きるから嫌なだけど」「聞きましたかみなさん！会長さんは甘い恋より苦く深い恋のほうが燃えるみたいですよ！」

「お前の脳には言語理解変換装置があるみたいだな。まあそういうわれると甘いのも捨てがたいが・・・」

「だそうです！ここは均等になるように小・中等部は甘く、高・大

学部は苦くしてあげてください！」

「その案は有り難いが、何も全校の女子がオレにくれるんじゃあるまいし……」

「何言ってるんですか！乙女には義理をみなに配るフリして本命をあげるんですよ！だからあなたにも囀の義理チヨコが沢山きますよ！」

「だからといって無闇に送られても……」

「本命なら恥ずかしくて名前書けませんよ。それが目印です」

「匿名でも本命が義理かわかるようにしてくれないと……」

「してくれないと？」

「してくれないとお礼の手紙が書けん」

「手紙といっても印刷した明朝体でしょう？」

「いや、手書き。時間かかっても頑張る」

「まあそれはあなたにチヨコがわんさかきたらの話ですね」

「てめえがしたんだろ！」

「そろそろ時間のようです！それでは、また次回」

「うそつけ！あと五分くらいは残って……」

「副会長さんがおわらせちゃったから校長にパース！」

完。

「会長の台詞の途中でフェードアウトとは……実に愉快！」

などと抜かす校長を尻目に、オレらは部屋でくつろぐ。

「楽しかったね！」

「お前はな。まったく、なんであんな話をオレが……」

「まあまあ。にしても暇だね。ブラックジャックやる！」

「唐突やる！てかまた試合前の特訓か？」

「うん！」

当然愛惟の笑顔に勝てず、ゲームスタート・・・
でもすぐに、

「・・・なんか飽きた。じゃ式終わり」。各自教室で担任の説明お
わったらかえつてよーし」

うちの校長は飽きっぽい。

「・・・終わりみたいだぞ愛惟」

言うとすぐに、

「じゃ教室行こうか」
「ん」

のやりとり。

長く組んでるだけじゃないんでね。
軽い意志疎通ができるんだよね。

そして教室。

「静まれー。HRはじまんぞー」

といってる我らが担任『マリア・コルネリウス』は『衝撃波』の通
り名で知られている。

『反逆者』『終幕』ともいわれ、その名の通り逆らえば五体のうち一
つを一週間封印する一撃を放つ。

事実、彼女と渡り合える人間はオレだけらしい。

「よ。お前等お疲れ」

「ども」

「お疲れさまでーす」

現在対等に接することができるのはオレだけ。

「さつさと帰りたいから、このプリントみとして」

「ういー」

「じゃ、説明すんぞー・・・」

話の内容は先の議題のことだけで、すんなり終わった。

「じゃおわり。さつさと帰れ」

ぞろぞろ帰りだす。

「オレ買い出ししてから帰るけど」

「一緒に行くー」

ということで、二人でスーパーへ。

昔の愛惟はスーパーのタイムサービスを知らず、定価で買っていたのを見兼ねたオレが戦場へ誘ったこともあるが、今では普通の主婦と同じ金銭感覚だ。

世間知らずにはしたくない、とご両親もいつてたしな。

「あ、卵やすーい。一人一つかあ。私もいるから二つ買えるね」

「ヨウ、みてこれ。つめ放題だってー。いっぱい持って帰ろうね」

いつてることが主婦そのものだ。
これがオレの教育！
自慢できたもんじゃないけどな。

「今日は何にするの？」

「そうだな・・・あ」

「ん？どうしたの？」

「今日からオレんち、家事手伝い見習いの居候がいるんだった」
「そうなんだ！初知りだよぉ！」

まあオレも今朝知ったわけで。

「じゃ、今日は三人分買わないとね！」

あなたうちで食べるの？

「どんな人かな」

礼儀正しいが泣き虫だな。

「好き嫌いあるのかなあ」

今朝聞いたときはないと言っていたな。

「年はどれくらいなんだろ」

契約書には人間年令でいうとタメだったような。

「あ、レジあいたよ！」

といわれたらカートを押すしかない。

「さっきからどうしたの？ずっと黙ったままで」

「愛惟のマシガントークについていけないだけですよ」

会計を済ませ、カゴから袋に移し、スーパーをあとにし、バス停まで歩き、愛惟狙いの変質者を振り返り打ちにして地獄か牢獄に送って、バスのって、うちに帰る。

何の変哲もない日常（？）が、今日でおわる。

なんて予言も予知もオレにはできないんだけど。

Re - d a y 2 タイムサービスといいつつ一日中安い店あるよね（後書き）

読んでいただいております。作者の結謳です。これからも二作平行で更新頑張りますので、感想・評価のほうありましたらよろしくお願いします。

Re - day3 勝負の世界に若さは関係ないのだ

夜。

一話↓朝、二羽↓昼、三話↓夜。

こんな進み具合の悪いスケジュールになっている小説を許してくれ。

「むむっ、これはどういか・・・」

などと悩んでいるのは愛惟だ。

なにをしているか、という・・・

「これで勝負！」

「甘い！チエックメイト！」

「ふにやにやあ〜？」

チエスです。

ちなみに、36連勝中。

「なんで勝てんのかなあ？私」

首をかしげる愛惟はパジャマ姿。

まあ時計の針は七時を回るくらいという設定なので。

「愛惟様〜、どうですか？ヨウ様に勝てました〜？」

登場したのは家事手伝い（仮）の風呂上がりバージョン。

一文無しはおろか着替えも何ももってきていなかったたので、オレのシャツとかをとりあえずきさせた。

「だめ、勝てないよ」

愛惟はプライベートだと語尾が日替わりなので、余力があれば研究してください。

「ヨウ様は強いですね。よし！私もリベンジさせてもらいます！」
「よし！ヨウ、二面打ちよ！私たち相手に勝てるかにゃ？」

二面打ち。

格・次元・レベルなどが違う人間同士がやりあうときのハンデの一種。

そして、彼女等が生み出した苦肉の策とは・・・

「じゃあ、私が将棋を指します！」

「OK！ヨウ、私と囲碁を打とうにゃ！」

今日は囲碁・将棋・チェスを混合させてやっている。
オレの頭ん中をバグらせようとしているんだが・・・

「えっと、チェックメイト！」

「・・・待ったは無いですか？ヨウ様」

将棋のリーチは王手、囲碁に待ったなどない。

「用語を間違えてるぞ。で、王手」

「へによによ？」

「わ、私は投了です・・・」

これで、愛惟には37連勝、ネロ（家事手伝い）に48連勝だ。
なぜ愛惟とネロとの戦績でこんなに差があるのかというと、圧倒的

に早く終わるから。

「そろそろ疲れたな。じゃあ敗者にマッサージしてもらうかな」

「ううゝ、私、ヨウに先にマッサージしてもらった記憶ないによ．．

．」

「そ、そんなにですか？私から見て愛惟様もかなりのやり手かと思つたのですが」

「そういうな。ちゃんと交代してあげてるだろう」

不満気な顔でマッサージする愛惟をみると、すこし甘くなつてしまふ。

まあ交代の後のご機嫌顔がかわいいんだよなあ。

ておい。

オレはこの小説を幼馴染とのべたならばすとおりいにはしたくないぞ？

「じゃ、そろそろあいつが帰ってくるから飯だな」

「なににや？新キャラかにや？」

「新キャラかよ！毎話毎話ごちゃごちゃとー！」

「ア。ル！？一番新しいガン。ム！？」

実はSE。Dシリーズが好きな作者。

たまにぱくるんでわかる方はこちらも研究を。

「そうですゝ。ヨウ様は話がわかりますね！」

「おう。オレの台詞もお前の台詞も同じ作者が書いているからな」

ピンポン。

「きましたね、新キャラ」

ドタドタバタバタガチャガチャボカボカ

「ただいま！お兄様！」

「妹キヤラ！？なんですかこの小説！幼馴染・メイド・妹！？そろえすぎだろ！？」

「安心せよ。こいつはオレの弟子だ。妹ではない」

「ラグちゃん久しぶり〜！」

「お久しぶりですアイちゃん！と・・・こちらは？」

ようやく気づいたか、ネロを見て頭に疑問符を並べる。

「こいつは今日から住み込みで修行しにきた『ネロ・レブ・アステイリア』だ。こっちはオレの弟子の『ラグナレク・アインシュレツト』のラグ、だ」

「よろしく願います！ラグ様！」

「こちらこそ！よろしく願いますね！ネロさん！」

こいつら丁寧キヤラでかぶったな。

大丈夫かよ作者。

「よし、面子もそろったし、麻雀やっか！」

『おお〜っ』

ジャラジャラジャラジャラ

と始まったのは宣言通り麻雀。

十五のガキ共が麻雀などやれるのか、というのはスルーしてくれ。
某全国通信型麻雀ゲームで一時三段まで上り詰めた学生作者が書い

ているからな。

一時？ああ、あいつは調子いいときはいいが、悪いときに一気に下がるタイプだ。

この前の休みで初段くらいにさがったんじゃないか？
だから一時なんだろ。

「あ、ラグちゃんチーチャ起家ね！」

起家とは、一番最初に親をやる人。

「はい、開始〜」

タンツタンツタンツ

牌を捨てている音だとイメージしてくれ。

「リーチ」

「はやっ！」

「ダブリー！？」

一番最後に捨てる順番のクルスは、一回目でリーチ。

リーチとは、あと一種類の牌で上げれる状態で、それを宣言することによって点数が上がる。

ダブリーとは、一回目に牌を捨てる時にリーチになること。
通常のリーチよりもワンランク点数が高くなる。

「安牌ないよ〜」

安牌とは、捨てても安全なパイのこと。

一回自分で捨てた牌では他人が捨てても上がれないので、リーチを

かけた人の捨てた牌を見て安全なパイを判断するのだ。

「ツモ。リー即ツモ。二千・千」

「はやいい！」

まあ今のは積込っているイカサマしただけだね。

積込っているのは牌をつむときに自分にいいパイが来るように仕向けること。

ま、つぎからはイカサマ無しの全力でやるかな。

「リーチ」

「おっかけ！」

おっかけ、つーのは誰かがリーチしているときに二人目、三人目がリーチすること。

一回リーチをかけると、その一局が終わるまで手を変えちゃいけないので、引いたパイがはずれなら即捨てないといけないので、危険なのだ。

ちなみに、四人目がリーチするとその局がおわる、というルールがあるぞ。

「一発！・・・ならず」

いっぱつ、というのはリーチして次の自分の番までに上がった点数上がる役だ。

「私も」

「それロン！メンピン一通ドラ！八千点！」

「はにゃ」

では、こんな感じで上がり続けますので、解説無しでどうぞ。
わかる方はそのまま、わからない方は少し飛ばしてください。

「リンシャン！メンホンドラ4！八千・四千！」

「ロン！メンチンタンピンリヤンペーコー！あ、これ『大車輪』じやん！」

「ツモ！タンピンドラ3！一万二千！」

「ロン！メンタンピン一発三色イーペーコードラ1」

「ツモ！リー即ツモ表3裏3親バ〜イ」

「ツモ！国土無双十三門張！」

「ロン！大四喜！」

「ロン！緑一色！」

こんな感じで上がり続け・・・

「くそうつ、半荘五回連続まけた・・・」

「ごめんねえ、強くってさあ！」

はやく上がりすぎてまだ十時。

「もう仕事するかな」

「え〜っ、もう？」

「しょうがないですよ、お兄様はこれで家計を切り盛りしているんですから」

「そうだね。じゃ、三人でぷ。ぷ。しょ！」

オレはいつもこの時間、とある仕事をしている。
コンピューター関係で、かなりの技術が必要だ。

「ふっふっふ。1と0の二進数で、オレにくぐれないセキュリティはない！」

最後の最後で危ない単語を言っちゃいました。

Re - day3 勝負の世界に若さは関係ないのだ（後書き）

はじめまして、皆さん。

主人公の幼馴染というベストポジションにいる、愛惟です。

麻雀はヨウが強いんですよ（全部強いけど・・・）

次回はネロちゃんの修行についての予定です。

定期テストで逝った作者はつらそうです。

それでは、また次回。

R e - d a y 4 コイスルオトメ? (前書き)

今回は予定変更しましたので、ご理解ください・・・結謳

Re - day 4 コイスルオトメ？

「今月の食費は・・・」

「いくらくらいですか？」

二人で家計簿とにらめっこしているオレとネロ。

一人前の夢魔（主婦にしか思えないが）になるというネロには、家計簿をオープンしようと思って呼び付けたんだよね。

「エンゲル係数が2%下がった」

「えんげる？誰ですかそれ」

「エンゲル係数つつうのは家計のなかでの食費の割合だ」

「ほうほう。ではひくいほうが節約できたということですね」

感心してうなずいているネロ。

危ない趣味をもってる人にはうけそうな童顔だ。

オレにはそんな趣味ないから妹みたいにしかみえないがな。

「ところで、エンゲルって誰ですか？」

「それは・・・知らん」

エンゲルさんについて話していると、ラグが来た。

「お兄様、今日は何を教えてくださいるんですか？」

「ああ悪い。今日はネロにうちの家事全般を教えなきゃいかんから。じゃ、今日は××銀行と　銀行をチェックしとけ。余力があれば何千万かもらつとけ」

銀行の何をチェックして何をどうもらうのか、物騒でたまらないが、

気にしないでくれよ！

「ノルマはいかほどに？」

「二千万」

「わかりましたわ」

一礼して帰っていく。

あいつもイイとこの令嬢だからなあ。

なんでオレに弟子入りなんかしてんだろうな。

「ヨウ様？ラグ様には何をお教えで？」

「ハッキング」

「なるほど、ハッキング・・・って、どのレベルですか？」

「警察・銀行・病院・政府を相手にしてもなんら問題ないレベルだ」

普通の人はやらないでね！やれてもあとが残ってつかまるよ！でも大丈夫！やれちゃったなんてうまくいかないから！

「捕まりますよ・・・で、その前に、誰に習ったんですか？」

「オレのクソ親父」

「お父様は何をしている人ですか？」

「コンピュータエンジニアとプログラマーを兼業してるとか言ってたが違いはわからん。その関係で愛惟と家族付き合いがあるんだよ」

「ほうほう。ではお二人は許婚とか？」

「いや、それはない。いずれ理由はわかるが。そこは作者も作案済みだ」

「この作品はよく作者の文字が多いですね」

痛いところを突いたな。

「それにしても、まだ中学生の息子にハッキングを教えるとは、不届きですね」

「その点は否めん」

まあオレの親父は嘘の塊だからな。

「ではそろそろ修業の話に・・・」

「そうだな。じゃあ今日は浅漬け作るから。オレの母さん直伝の技法をお前に伝授してやる。心してかれ」

「はい！」

と、大袈裟に言ったものの、浅漬けは一つしか作り方知らないんだけどね。

「はうう、どうしよう」

私、ただ今大変迷ってます。

おっと、これは失礼。

このままだと、いきなりヨウが女口調になったのかと思われてしまいますわね。

とりあえずこんにちは。

ヨウから一人称交代で、現在は幼馴染みの愛惟が語っております。

「愛惟、ちょっといらっしやい」

「はい」

お母様が食事以外で呼び出すなんて珍しいですわ。
なにか臭う、てやつです。

「今、ヨウ君と話してただけだね。冬休み、私たちは海外出張で
いないから、愛惟をヨウ君の家に預けることにしたの。」

「うん・・・ええっ！！なんで勝手に決めるのよ！ま、まだ心の準
備が・・・」

「心の準備が？どういう事かしらねえ」

しまった、です。

つい口が先走ってあんなことを・・・

「あなた、ヨウ君のこと、好きなんですよ」

「え！？な、なんというかそれは、その・・・」

むう・・・

母親の勘は当たらないかと思っていましたのに、こんなところで・・・

「その反応を見ると当りね。実はね、最初に気付いたのはお父さん
よ」

「お父様が？」

「そう。あなた、友達と話してるときよりもヨウ君と一緒にいるだ
けでうれしそうだ、って仰ってたわ」

月に二、三回しか会わないお父様にばれてるということは、毎日会
うような学友には・・・

「安心なさい。私たちは公認してるわ。向こうはどうか知らないけ
ど」

「私、ヨウの両親と会ったことないからなあ」

「何？もうあいさつの話？気が早いわね・・・そうそう。お父様から伝言があるわよ」

お父様の秘書をしているお母様は、毎日会っていますから、なにをきいてきたんでしょうか・・・

「今年は義理じゃなくて本命チョコ渡しなさい、だって」

「へ！？」

「あなたいつもヨウ君に義理で渡してるじゃない。だから、今年は本気で思いを伝えなさい」

「で、でも・・・」

「あ、ならいつそのこと、全校集会で渡しちやいなさいよ！副会長が、会長に愛の告白なんて、いいんじゃない？」

こ、この人は何を言いだすんでしょうか。

そんなことしたら、全校にいるヨウのファンにWANTEDされま

す。

「でもヨウ君、人気あるって聞いたわよ。大丈夫なの？」

「大丈夫じゃない！ライバルなんてかなり多いの！」

今の学園には、二人に一人がヨウの公式ファンクラブに属しています。

公式、というのは校長先生やシエル先生など、学園の有権者が許可したからです。

「あなた、ファンクラブの会長なんでしょ？」

「違う！会長はマリア先生！年の差三つくらい気にしないっていつて会員番号一番の座についてるの」

マリア先生もシエル先生と同期で、二人は親友だそうです。

ジャジャジャジャー！ジャジャジャジャー！

「あら、電話ね」

「お母様、いつからクラシック系着メロに？」

「はい、そうです・・・わかりました」

「どなたから？」

「ヨウ君からよ。今から来るって」

どどどどうしよう！

たった今変な会話してましたから、妙に意識してしまいます・・・
ああ、これが恋というもののなのでしょうか・・・

「ちょっと、どうしたの？顔真っ赤よ？もしかして、意識しちゃってるのかしら？」

「しつこい！」

「ちゃんと挨拶しろよ？オレの両親のお得意様なんだから」

「はいっ！つつしんで一緒にさせていただきます」

現在夕方五時半を回る。

オレはとりあえず隠す意味はないのでネロを愛惟のお母様に紹介しようと思っただけ。

日頃世話になってるし、面倒みてもらう事は必須だな。

「愛惟様のお母様はどんな方なんですか？」

「一言で言つとあれは詐欺だね」

「何がです？」

「見た目若すぎ。本人は高校卒業してから成長とまったと言つて
るが、行き過ぎた成長『老化』すらとまってる」

「実年齢は？」

「四十すぎつていつてるがわからんよ」

「地球人ですか？シ。ツカーに改造されたんですか？」

おい作者。

貴様中。生の分際でシ。ツカーを使うとは不届きだぞ。

「あれは絶対賢者の石使ってるね」

「ハ。ーのほうですか？」

「鋼。錬金術師のほうだ」

「伏せ方あつてますか？」

「うるさい。わかりやすくしたんだ」

「いえいえ、本来伏せ字というのはですね・・・」

ネロが独自の伏字論を語りだすとまもなく、静嵐院家の屋敷についた。

「あらヨウ君、いらっしやい」

出迎えてくれたのは、若い女性。

見た目は二十歳前くらいかな。

「お邪魔します」

「あら？そちらは？」

「初めまして、ネロ・レヴ・アスティリアと申します。ネロとお呼びください」

「あらあら、ご丁寧にどうも。私『静嵐院 愛花』です」
「えっと、愛花様は愛惟様のお姉様ですか？」
「お上手ね、ネロちゃん。私が愛惟の母よ」

不適に笑って、自慢げに答える姉さん。

あ、姉さんてのは愛花さんのことな。
若いから最近はその呼んでるんだよ。

「はへ？はへへ？ご、ご冗談を？」

なんかネロがおかしいな。
そんなに予想外か。

「いえいえ、本当よ」

「はへ？」

余談だが、今晚ネロの頭からははてなが消えなかった。

「じゃ、オレらはこれで」

「ご馳走様でした」

はうう。

い、意識しすぎてぜんぜんヨウの顔を見れませんでした・・・

「あらあら。ヨウ君きてからずっと顔真っ赤だったよ？」

「だ、だって・・・あんな話した後だったから・・・」

「あらら。可愛いこというわねえ」

「もう・・・勉強してくる!」

まったく・・・

今話はすこし長かつからといって私をいじりすぎです・・・

まあ、確かに少し前からヨウのことを想っているのは自覚しています。

パ〜ララ〜ラパ〜ララ〜ラパ〜ララ〜ララ〜♪

わかり辛いと思いますが、信号機が青の時のあのBGMです。

「もしもし?」

「あ、もしもし、愛惟様ですか?」

「えっと、ネロちゃん?」

「はい。夜分遅くにすみません」

何かあったのですかね。

「どうしたの?」

「いえ。ただ、今日は愛惟様、ヨウ様とあまり話してなかったような気がしますして」

「え?え?え?」

「喧嘩とかしたんですか?と思ひまして」

す、鋭いですね・・・

どうでしょうか・・・

「え?い、いや、そういう意味ではないんですが・・・」

「ふむ。なぜか妙な敬語・・・怪しいですね」

「え？な、なんでもないですって」

「さては、恋ですか？」

「はへ？」

「なんか、チラチラヨウ様の顔をみては目をそむけていたので。心なしに顔が赤かったような気もして・・・」

な、なぜそこにたどり着くのですか？

ネロちゃん、鋭すぎる！

「わかりました。愛惟様がそういうお気持ちだということは」

「え？や、そういう意味では・・・」

「あ、この番号は私の携帯ですので、登録よろしくお願いします」

「あ、ちょ、ちよっと！」

「では、おやすみなさい・・・」

ブツッ、プウ、プウ、プウ

誰か助けて・・・

R e - d a y 4 コイスルオトメ? (後書き)

どもども。最近出番の少ないヨウですわ。今話から何話かにわけてサブキャラをメインにしたストーリーのつもりだ。またしばらくオレの出番はないが、よろしくな。

Re - day 5 ユメミルオトメ？

「今日のノルマは二千万でしたね。がんばりますわ！」

返事なし。

わかってはいても、少し淋しいですわね。

初めまして、読者の皆様。

わたくし、ヨウお兄様の一番弟子『ラグナレク・アインシュレット』の通称ラグですわ。

犬の名前の紹介みたいになってしまいましたが、わたくしは人間であることをご理解ください。

「どうだ？調子は」

「あわわ！？・・・」

ドタツ、バタツ、パタンキュウ

「おい、大丈夫か？」

「ええ。ちゃんとリアクションとれましたわ」

「着眼点はそこか」

わたくしのボケに的確な突っ込みを入れてくださったのは、愛しのお兄様。

そうですはいそうですとも！

わたくしがお兄様の弟子になったのは、お兄様に淡い恋心を抱いているからなのです。

「ラグは女の子なんだからってっちゃんみたいなリアクションすんなよ」

この寛大で優しいお兄様・・・惚れない女はいませんか。ちなみにてっちゃんとはお笑い芸人の出川なんとかのことでしょう。

「どうした？顔真つ赤で虚ろな目して」

「い、いえ、なんでもありませんわ」

「あやしい・・・もしや」

ま、まさかあの激愚鈍で有名な（失礼ですが）お兄様に気付かれ・・・

「頭打って脳なかいかれたか？」

「はうっ！」

し、心配無用、ですわ・・・

「ナ、ナンド！？何二対シテズッコケタンダ？」

「お兄様、壊れたしーすりーぴー。ーの真似はおよろしくださいます。

・・・」

「すまん。実はオレ・・・スターウ。ーズみてないんだ！だから元ネタ知らない！」

「送り仮名がすべてカタカナでしたら誰でもロボットに思えますわ」

ユーモアで面白い方でしょう？

彼の魅力の一つですわ。

「で、何用ですか？」

「おっと忘れてた。最優先でやってもらいたい仕事が入った」

「なんですの？」

「この人物について洗いざらい調べる。生憎オレは別件で忙しい」

「報酬は？」

「これはオレからの頼みだ。やってくれたら何か一つ願いを叶えてやるから」

お兄様におねだりするといったらやっぱり・・・

「じゃあ一日デートしてくださいませ」

「えー」

「軽いおねだりです。してくれないならお引き取りください」

言うとお兄様は、

「わかったわかった。しゃーないなあ」

「はい」がんばりますわ！」

さて、お兄様がお帰りになったので、わたくしはさっそく依頼された内容をそろえます。

お兄様に弟子入りしてからはや二年・・・

たった二年でわたくしをここまで成長させたのは愛以外にありえませんがね。

お兄様との出会いは衝撃的でしたわ・・・

『お？可愛い子発見。何してるの？一人？』

『オレらと遊ばない？』

『なんですか？あなた方は』

まあみるからに柄の悪いナンパでしたわ。
グラサンロンゲに、モヒカンピアスの二人組。

『つれないこと言わないでさ、遊ぼうぜ』

『楽しいことしようぜ？』

『いやです。消えてください。同じ空気を吸っていると思うと楽しいことも楽しくなくなります』

『ああ？何だこのガキ、生意気な』

『つれてって剥いちまおうぜ』

ギロリ、とはこのことですね。

一気に目つきが変わり、乱暴にわたくしの腕をつかんできました。

『やめて！何するんですか！はなしてください！』

『ぎゃあぎゃあわめくなクソガキ』

『おとなしくしてれば殺しは・・・』

口をふさいで、無理やり連れて行かれそうになったところを、そのとき！

『おい、お前ら』

『あん？なんだてめえ。死にたくなけりやおとなしく・・・』

『うぜえ』

ドゥーン！

音がしたと思えば、グラサンの腰が抜けていました。

『・・・はい？』

『そいつ、オレの連れなんだけど?』

そういつて、銃口をモヒカンの額に突きつける。
冷ややかで鋭い眼つき・・・

窮地に立たされたわたくしを射抜くには、十分すぎる眼光がありましたわ。

『ラグちゃん、大丈夫?』

『平気?ラグ?』

うしろから友人たちがわたくしの元へ。

考えてみれば、彼女たちが遅刻したせいでわたくしがこんな目にあつたのです。

『大丈夫か?』

『え?あ、あ、はい・・・』

ずっと手を差し伸べて、微笑みかけてくれる男性。

『えっと、さつき連れって言うていたのはわたくしのことですか?』

『ああ。あいつらがしつこくしてるのをお友達が心配していてな』

『なぜあなたが?』

『ものすごく困った顔をしてあたりをきよろしてたから、ついほっとけなくて・・・』

苦笑いをして、きびすを返していこうとする彼。

『あ、あの!あなたのお名前は!?』

『ああ、名前?オレは貴崎^{たかさき}頼だ。じゃあな』

『あ、ありがとうございます!』

『おう。次からは気をつけろよ』

「はあ・・・懐かしいですわ」

「なにがです？」

「あっひゃあ！」

振り向けば・・・ネロちゃん。

「グーフ。ーですか？」

「さすがですね。それを見極めるとは・・・」

ネロちゃんとの第一印象は『プロ』でしたわ。
あどけない顔つきの裏に隠された鋭い頭脳。
強敵ですわね。

「で、なぜにあのようなとろけた顔をしていたのです？」

「あ、やはり顔に出てまして？」

「ばっちりでした」

見られてしまつては仕方が無い、ということだ、

「・・・で、かくかくしかじかあったわけですよ」

「そ、そんな出会いが・・・」

「どう？驚きましたでしょう？」

「で、なぜ再会できたのです？」

「ネロちゃんは知りませんでしたね。わたくしの両親」

するとネロちゃんは首をかしげて、

「はい。いいとこの令嬢、というふうにヨウ様から聞いただけです」
「まあ。お兄様ったら。いいですね。説明しておきますね」

「・・・で、かくかくしかじかあるわけですよ」

「そ、そんな事情が・・・」

「どう？驚きましたでしょう？」

「で、なぜ弟子入りしたのです？」

「ネロちゃんは知りませんでしたね。わたくしの想い」

するとネロちゃんは首をかしげて、

「はい。顔は可愛いが危険度最高レベル、というふうにヨウ様から聞いただけです」

「・・・まあ、お兄様ったら・・・いいですね。説明しておきますわね」「いえ、結構です。このまま似たような会話をするのは飽きますから」

苦笑いして、何か懐から封筒を取出し、わたくしに差し出す。

「なんですか？これは」

「本来は雇い主である方にお渡しするのですが、ヨウ様は是が非でもラグ様にと」

お兄様がわたくしにプレゼントを！

気になって仕方がないので、袋を八つ裂きにして中身を出してみましたわ。

「ん？・・・こ、これは」

「どうぞ、お使いください」

出てきたのは・・・CD？

「なんですの？このCD」

「ヒアリングCDだそうです。半人前の私たちがお世話になるせいで寝不足になる雇い主様が急増中、このことで、和やかな睡眠を贈るために夢魔の力を込めたものです」

「長い説明ありがとうございますわ」

「喜んでいただけましたか」

「ですが、なぜこれをわたくしに・・・」

「そ、それは・・・」

な、なぜネロちゃんは言いづらいのでしょうか・・・

「わたくしでしたらお気になさらずに、どうかお教えてくださいな」

「はい・・・ヨウ様が『これさえあればオレのベッドにこないだろうから』と」

ネロちゃんが顔を赤らめていた理由が今明らかに・・・

「では、お兄様にお伝えくださいませ。わたくしから『これはお兄様のベッドで使わせていただきます』と」

「わ、わかりました・・・」

先程に増して顔を赤らめてネロちゃんは部屋をでていきました。

「ふふ。ネロちゃんもまだ子供ね」

キーンコーンカーンコーン」

学校のチャイムではありませんわ。

その着メロです。

着メロといつても、録音した音を直接使っているくらいのハイクオリティですわよ。

「あらあら？クルス様から。珍しいですわね・・・」

「ふむふむ。これはまさに『次回への伏線』、てやつですわね」

クルス様からのメール。

意味深な内容。

さてさてその真相は！？

次回もお楽しみに！

R e - d a y 5 ユメミルオトメ? (後書き)

なんかラグが勝手にしめてるっぽいけど、一応ちゃんとあいさつさせてもらっぞ。ということ、ヨウです。とうとう次回でクルスのほうとリンクしちゃいますよ。どんな形でリンクするかは次回のお楽しみ、でことで。じゃ、また次回。

R e - d a y 6 ヒトリノオトメ・・・（前書き）

更新遅れました。その分今回は長めなので許してください・・・

Re - day 6 ヒトリノオトメ・・・

あの激闘から早一週間（麻雀の）

激しい攻防のなか、私たちはヨウ様を残りHP1000まで追いつたのです（麻雀で）

だがしかし、彼は屈する事無く私たちに立ち向かってきました（麻雀で）

残りHP43000の私は、彼の伝説の奥義『国土無双十三門張』を直撃し、64000ダメージを受けた私ははかなく散っていったのです（何度もしつこいが麻雀で）

あの日から私たちは死を覚悟した地獄の特訓を続けてきました（やっぱり麻雀の）

どんな手を使っても彼を倒すために・・・（麻雀で）

そしてここはある学園の廊下。

三年生の教室前・・・

「じゃあ転入生入ってきて〜」

戦いの幕開けです。

（数日前）

「はあっ、はあっ、はあっ・・・」

「はい、スプリットでダブルブラックジャックね」

「はあ〜・・・勝てない」

オレとネロは、夕食をどちらが作るかを賭けブラックジャック（ト

ランプゲームの一つ。二枚以上のカードで21に近付けるゲーム）をしている。

バーベツトはオレの専売特許であるにもかかわらず、ネロは果敢にも自分から勝負を仕掛けてきた。

あ、バーベツトってのはカードゲームでのイカサマのことね。

「残り・・・¥0」

「じゃ、オレの勝ちな。夕飯よろしく」

「メニューは？」

「任せる。頼りにしてるぞ」

そういつてヨウ様は自室へ戻りました。

「くう、今日のヨウ様、何行かしが出番ないからって力み過ぎです・・・」

今日は私メインの展開だからガンバ、と作者から仰せ使っているの、よろしくです。

「只今帰りましたわ。あらネロちゃん。どうしたんです？今日はお兄様が料理当番のはず・・・まさか、お兄様の身に何か!？」

「い、いえ。ヨウ様は今日も元気の塊です」

「じゃあ何故ネロちゃんが夕飯の用意を？」

あまり負けたとは言いたくないですが、ラグ様とは『打倒ヨウ様』の名の元を集った仲間ですから、教えないわけにはいきません。

「と、特訓の成果を試すために勝負を挑みまして・・・惨敗しました・・・」

「そ、そんなことが。大変ですね」

「いえ、料理は好きなので大丈夫です」

本当に好きなので問題ないんですが、肝心なのはヨウ様に勝てないこと。

どうにかならないでしょうかねえ。

「ちょっといいかしら？ネロちゃん」

「はい？どうしました？」

「前に一度、アイちゃんからきいたことがあるんです。過去に一度、ヨウ様に勝ったことがある人がいるって」

「え？その方はどちらに？」

その伝説が本当なら、弟子になるしかありませんね。

「その方にはどうすれば会えるんですか！？」

「きくところによるとお兄様と同じ学園に通っている先輩らしいですわ」

「あうう、それではあえませんよお」

がくりとショックを受けた私に、ラグ様は不敵な笑みで近づいてきました。

これがヨウ様の言っていた悪巧みモードですね。

確かに怪しい・・・

「ネロちゃんが学園に転入して探せばいいんです」

「はへ？」

私が頭にハテナを浮かべると、ラグ様は続けます。

「お兄様と同じ学園に転入して、アイちゃんと一緒に弟子入りする

んです。如何でしょう？」

「ですが、どうやって？」

「アイちゃんに話して、手続きを手伝ってもらえばいいんです。ネロちゃん、勉強の方はできます？」

「その点は問題ありません。個人技だけが私の取り柄でしたから・・・でも」

「でも？」

ラグ様になら言えますが、ヨウ様に知られないといいんですが・・・

「あの、ヨウ様には言わないでくださいね？」

「は、はい・・・」

「私、これでいて対人術・・・つまり、人間と接するのが嫌いなんです」

「な、なんですか？ネロちゃんはこんなにいい人なのに・・・」

「私の父が、最低の人間だからです」

「え？」

「夢魔には、基本的に性別がないんです。人間でいえば、みんな女性なんです。だから、人間の男性と子供を作るんです。夢魔の血は濃いので、人間の男性と間でも十分に立派な夢魔が生まれるんです」

「つまり、父親はみな人間、ということですね」

「はい。でも私の父は、普通じゃなかったんです・・・遺伝子操作して生まれた。身体能力は異常に高かった。でも、一つ彼にはかけているものがあつた・・・」

「な、何がですか？」

「なんといいですか、人間らしい心、ですね。だから彼は少しでも人間らしくなりたいというロボットみたいでした。『早く人間になりたい』で有名な妖怪人間と同じでした」

「そ、それは・・・」

おりよ？

シリアスムードぶち壊してたね。いけないいけないっ！

「最初は日に日によくなっていた、と母は言っていました、実は違っただけです」

「どういふふうに？」

「逆でした・・・どんどん壊れていた・・・」

「壊れていったといっても、完全な人間だったのでしょうか？なら何故・・・」

「完全だったのは体だけ。中身は・・・心は出来損ないだった！不安定になって研究施設に隔離されて・・・しかもそれだけでなく、人間は相性を調べるといって母を呼び出し、血液とかのデータを必要分とつたらそのあと私を人質に強姦しようとまでした！！そんな最低な人間を信じられる！？だから私は、一人前の夢魔になって復讐してやる！！」

「そのあとどうなったか、とはききません。ですが、これだけは言えますわ。確かに世界はそんな最低な人間ばかりですわ。そこは否めません。でも、それだけではないんです。では、あなたの言う最低な人間にお兄様は含まれますの！？違うでしょう？だからあなたは彼を選んだ・・・そうでしょう！？」

「違う！！違う違う違う！！私は・・・私はそんな・・・」

「違います。現に、あなたはわたくしを信じてくれたじゃないですか・・・」

「・・・う、私は・・・私は・・・どうして・・・どうしてあんたは・・・」

どうして私のために・・・私なんかのためにそんな真剣に・・・

「どうして私の事を思ってくれるんだ・・・か？」

「よ、ヨウ！？」

「それが素のお前か」

「そ、それは・・・」

「隠す必要はない。人間だろうが夢魔だろうが隠し事くらいあるさ。にしても、ひでえな、お前のいう人間のイメージは」

「イメージなんかじゃない！！本当の事よ！！」

「・・・お前、ネコ好きだって言ってたよな」

「それが何！？ふざけてると殺すわよ！！」

『黙れ』

「！！」

な、何？いまの・・・いつものヨウじゃなかった・・・

「ふざけてるわけじゃないし貴様何かに殺されるほど弱くない」

「な、何を・・・」

「お前、自分で言ってただろ・・・ネコに引つ掛かれたのに『私の事が恐いだけ。わかりあえればきっと仲良くやれる』って」

「そ、それは・・・」

「それと同じだろう？確かにお前の過去に比べれば1/144スケールだろうがな」

「お兄様、それはガ。プラですわ」

「・・・とにかく、きめつけるのはよくないね」

「お兄様、それは『出典・シャ。マンキング』ですわ」

「・・・まあ、諦めるな。立って前に進むしかないんだよ」

「お兄様、それは『出典・鋼。錬金術師』ですわ」

「・・・いいか？人の生き方ってのは自分で見つけていくものなんだ」

「お兄様、それは『出典・レメンタルジ。レイド』ですわ」

「・・・まあ、人生を何かに置き換えてみるといい」

「ヨウの場合は？」

「賭け事だ。賭けてるもんは・・・」

「命じゃねえんだ。でしよう?」

「『出典・最遊記』でしよう?ヨウ」

ふふ。

やっぱヨウにはかなわないな。

「う・・・みんなしてオレをいじめんなよ」

「それは『出典・ガンダムシードディスティニー』でしよう?」

「ハ。ネですわね」

あ、そういえば私、ずっと素のままだった!

気付いたかな?

第一話で、寝起きの私は素が激出ていたことを!

「にしても、ひでえな、お前の素のモードは」

「・・・頑張つて治します」

「いずれそっちが普通になるよ」

「そうですね。現に、わたくしと初めて出会った頃のお兄様はかなりルナティックでしたわ」

「ルナティックって?」

「精神異常者や、狂人を意味しますわ」

そ、想像できません・・・

あの優しいけどたまに頭のネジが2、3本・・・いや、2、30本は抜けるヨウ様が・・・

「誰のネジが抜けまくってるって?」

「おりよ??エ。パー伊藤?」

「・・・口に出てたんだよ」

「エス。ー伊藤がですか?」

「ネジの話だ！大体オレはカバンから出てきたりしない！大体。スパイ伊藤のテレパシー何ぞない！分かりづらい言い回しするな！」
「激しいツツコミですねえ。ところで、ヨウ様に一つお願いがあるのですが」

「ん？」

「私、決めたんです！修業のたぐい対人術を学ぶ！だからヨウ様、私をヨウ様と同じ学園に転入させてください」

「いいよ」

「軽っっっ！！早っっっ！！」

ざわざわざわざわ

き、緊張しますー・・・

こんなに大勢の人間に注目されるのは初めてですし・・・

「じゃ自己紹介よろしく！」

先生、親指たててうれしそうですね。

「はい！『ネロ・レヴ・アスティリア』と申します。よろしく願
い致します！」

『よろしく〜』

おりよ？

ノリのいい先生と女子生徒が多数のクラス。

たしかヨウ様もこのクラスのはずなのに・・・いません。

ガララッ

「遅いよヨウ君!」

「転入生あいさつしちゃったよ!」

みなに色々なことを言われている中、確かにヨウ君という単語が聞こえたので振り向いてみると・・・

「いやー、ごめんごめん。ちょいとお巡りに捕まっちゃって
『何やったの!?!』」

「知らない。校門の前でいきなり」

私だけでしょうか・・・

ヨウ様が警察に捕まった理由が分かるのは・・・

「何もやってないのになあ」

だってヨウ様、ダー。ベーター仮面をフルフェイスでかぶってるじゃないですか・・・

「お、やっぱ今日くる転入生ってお前の事か」

「・・・はい。よろしくお願いします」

「何だお前等、知り合いか」

「我が家に脱北してきた脱○者です」

「違います!生まれも育ちも江戸っ子じゃありませんがちゃんと
したこの国の育ちです!」

脱○者に伏せ字はいるのですか?

「あれ、そっぴや静嵐院のやつは?」

疑問に思う先生。

あ、そういえば二人はいつも一緒に登校してるんですた。

「あいつは恒例の『嘘の親危篤』で再び呼び出されてしつこい親にいい加減成敗することとで休みだ」

「恒例なのか・・・ま、いいや。じゃ、出席とるぞー」

不思議な理由は突っ込まないんですね。

「欠席理由は・・・危篤で」

「先生、それではアイ自身が危ない状態ですよ」

「あ、そうか。じゃ・・・成敗」

「それだと成敗するのかされるのかにかかわらず不穩です」

どこことなく不安な先生ですね・・・

そう思っていたら先生は、次回への伏線となる爆弾発言をしました。
・

「あ、言い忘れてたけど明日のテストで学年一位とれなきゃ死刑な。逆に一位とれたら私の権限で一学期中私服登校許可に加えこの教室にエアコン付けてやる。寒い冬を快適に暖かく過ごしたくば頑張れ」

R e - d a y 6 ヒトリノオトメ・・・（後書き）

さあーで、来週のサ。エさんは？・・・こんにちわ！ネロです！なんか今回はいろんな伏線が飛び出てしまいましたが、一つ一つ出しますので楽しみに！

R e - d a y 7 波乱の臨時補習（前書き）

気が付いたら毎月九日更新の伝統が生まれてました

Re - day 7 波乱の臨時補習

放課後の教室・・・

集う男女・・・

真面目に話す男子生徒と、それを熱い眼差しで見つめる女子生徒・・・

そして・・・

「んじゃ、今の公式使った例題を解いてもらっぞ」

『はい!!』

「さっきと同レベルの内容だからオレが教えた公式で倍以上速くなるはずだ！」

はあ、オレ、こんなトコで何やってんだろ・・・

「一番速く終わった人で正解率が高かった人にはご褒美でヨウにおさわり・・・じゃなくて、肩揉みする権利をあげまーす」

『キヤーツ!!』

愛惟、なぜオレに肩揉みするのが褒美なんだ？

普通教師に肩揉みスルのは最下位のやつに罰としてやらせるだろ・・・

そして・・・オレはなんでこんなことさせられてんだろ・・・

～～回想～～

ここは学園の屋上。

そこに三人の男女がいた。

そして何やら、二人の女子生徒がオレに詰め寄っている・・・
痴情のもつれじゃないぞ

『どーするオレ？どうすんの！？続く！（ラ。フカード）』の状況
に陥っているのは確かだが

「ヨウ！どうすんの！今年はその時みたいに失敗するわけにはい
かないんだよ！」

「そうですねヨウ様！あの先生とやりあえるからってクラスを犠牲
になんかしませんかよね！？」

話は前回最後、マリア先生のいった一言が原因。

月例中間テストでクラス平均が一位じゃないと死刑ということだ。
クラス分けはランダムだから当然偏差値の低いやつが出てくる（低
いといっても60前後）

この国じゃ冬に一番寒いのは一月だからみな必死だ。

「うるさいなあ。オレらには関係ないだろ」

飛び級候補のオレと愛惟はもちろん、ネロも頭がいい（編入テスト
全教科満点）から、問題ないはずだが・・・

「何が関係ないの！ヨウが去年補習に付き合っただけの点数が
跳ね上がったじゃない！」

ああ、オレに出来が悪いやつをどうにかしろっていったんのか

「そうですね！なら今回は暖かい学校生活のために皆の点をあげて
ください！」

「やだよ。大体あの娘は親がご立腹で命が危ないって言って泣き付
いてきたんだよ。結構可愛い娘だったからほっとけなかったんだ」

まあ・・・あの娘はあるテストが返却された日の深夜に泣きながら電話してきたんだよ。話を聞くと点の事で夕飯のあと三時間説教食らって次のテスト次第で将来約束されたはずの社長のイスが妹にいつてしまう・・・とかかなりリアルな後継者争いに巻き込まれたのだ。それで一カ月後のテストで点をあげたいから家庭教師をしてくれと・・

「確かあの娘大手パソコンメーカーの社長令嬢だったよね」

「ああ。しかも大変なのはその後、向こうの親に同じ年の男を連れ込んで勉強するのに激反対された事だな」「どうしたんです？ 国家軍人なら大丈夫なのでは？」

「いや。地位高すぎて問題おきてももみ消されるんじゃないか、って」

最初は身分証明証も疑われたし

「色々な苦労を経て、オレはあいつを学年四位に育て上げた」

当時の順位は一位がオレ（全教科満点）、二位が愛惟（全教科中一問ミス）、三位が次回登場予定の会長秘書（全教科中二問ミス）、そしてその娘が三問ミスで四位だ

実際愛惟も会長秘書もオレが育て上げたしな

オレって天才！

と思っていたら・・・

「じゃあ会長権限で教室貸し切ってA組の放課後補習をしよう！」

～回想終了～

となつてしまつたのだ

なぜだあゝ・・・まあ、みんなの肩揉み技術はなぜかハイレベルだ。

「愛惟、さつき事故つたときから腰が痛いんだ。あれはおまえに過失があるから腰をマッサージしろ」

さつき、というのは屋上で話したあと。愛惟が階段から落ちかけて、庇おうとしたら。頭二時五十分みたいにぶつ倒れた・・・
庇う、なら当然オレがしたで、愛惟の体重がオレの上に落ちてきたわけで・・・

「ごめんなさい・・・」

「もう謝んのはいいから、早くやって」

オレは行儀悪いが教師用の長い机に寝転がる。

「えつと・・・ここらへん？」

「あーそこそこ」

なんてマッサージさせてくつろいでいると・・・

「・・・ヨウ様、愛惟様。お二人にまがましい殺気を放っている人物が・・・」

別に人に恨まれるようなことは・・・いっぱいしてるけど、殺される程恨まれるはずは・・・

心当たりを必死に探していると、一人の生徒が教えてくれた。

「か、会長？なぜ愛惟があなたの背中にまたがっているの？」

『（副音声）なんであんだがヨウ君の上にまたがって気持ち良くしてあげてるの！？』

すると、いきなり顔を赤らめたネロ。

（大胆なこと考えてますねえ）

まあネロは夢魔の力で心を読んだんだろうな。

ま、人の考えなど微塵もわかってほしいオレには関係なかった。でもなんか恐いから、適当になんかいつとこ。

「愛惟が男を尻のしたに敷きたいくらいのSだから」「な、なんでよ！私がヨウを・・・襲うわけないでしょ！！！」

「愛惟様、その状態（オレの上に馬乗り）で『襲う』と言う単語は危ないかと思われ・・・」

「愛惟はSMSだから」

『何それ？』

「考えてみな」

もちろん、心を読んだネロにはわかった
オレの頭の中の等式が

『愛惟〓スーパームツツリスケベ』

もうネロには顔を赤らめる余裕なんかなかったんだろうな。
ただ笑ってた。

まあ爆笑だけど。

おっと補足だ。基本的には夢魔と契約者同士は互いにテレパスイ〜でつながっているがオレたちは必要なとき以外にテレパスイ〜は使

わないことにしている。

ま、便利だから今みたいに使うけど。

「何？なんでネロちゃんにはわかったの？」

「え、えつとですね・・・前々から聞いていたので」

当然テレパスイのことは皆には隠してる。

だから今のはナイスフォローだ。

「二人はナカイイのねえ。二人だけの秘密事があるなんて」

あ、愛惟のやつすねてやがる。

「なんだよ。オレとお前にだってあるだろ。たとえば・・・冬休みにオレんちで夜に・・・」

「ちょ、ちよつと！誤解されるようなこと言わないでよ！・・・で、何の話？」

最後は小声で確認してきた。

はずかすいゝ事いってやろうかな

「お前が深夜にオレのベッドに・・・」

「ち、違うよ！違う違う！あ、あれは寝呆けてて・・・」「自分から一緒に寝よっていったのは誰だっけ？」

「お願いします黙っててください」

確かホラー物の映画みたあとだったな
恐くて寝れなかったらしいが

「しっかりくつついて離さなかつ・・・」

「本当にお願いします誰にも言わないでください」

どうしようかなあ

なんて思っている

「おわったよ。愛惟が採点するのよね。はい、よろしく。師匠！え、えっと・・・失礼します！！」

そういつて誰かしらんが寝ているオレの横に立ち、肩揉みを始める。ん、こいつやけにうまいな
と思ったら・・・

「なんだ、フィルか」

「なんだとは何よ！せっかく気持ち良くしてあげてるのに」

可愛い顔で誤解され率の高い単語を放ったのは『フィラルトス・テ
イーリシア』

先ほど話した社長令嬢でオレが学年四位に育て上げたやつだ
もともと覚えはいいので教える側としては善い生徒。だが、こいつ
には一つ欠点がある

「私が精一杯気持ち良くしてあげる！何かしてほしいことがあった
ら何でも言ってね。頑張るから・・・」

フィルは誤解されそうな単語ばかりつかう。

最初は天然かと思ったが、家庭教師しているうちに故意であることがわかった。

しかも『中等部美少女四天王』などという謎の四人組の一人で、ナンバー2の座にいるらしい。

そのため周りの男子に疑われ（オレが）何度も命を狙われた。

（ヨウ様は彼女と何かあったのですか？）

（違う。フィルはわざと誤解されそうな単語ばかりつかうんだ）

（や、やり手ですね）

ネロは説明したらわかってくれたが、他の女子はしぶといから困るんだよあ。

・・・って、言ってるそばからなんか視線が痛いしどうする？どうするオレ！（ライフ力。ド）
・・・逃げるか

「はいじゃあ数学はここまで！次は英語！」

『はい師匠！！』

違和感あるなあその呼び方。

最初に言いだしたのは愛惟みたいだ。

さつき教室入って初めて見たときは新手的いじめかと思ったよ。

その決め手は皆の巻いてる鉢巻きに書いてある内容を説明すればいいかな。

『虎の穴・貴崎セミナー』

虎の穴てふざけてるだろ

後半もろ臨海。ミナーじゃねえかよ・・・

それを教室にいるやつ全員付けてんだぜ？

しかもネロまで・・・

「ネロ、喉乾いたしいつもの買ってきて。お前の分もなんか好きなの買っていていいから」

「ありがとうございます。ではいつてきます」

人前でのネロは素直でいい娘だな。

まあキヤラ替え宣言したし、本人も努力してるしね。
なんて事を思っていたら事件は起きる。

「ヨウ様！！外に反生徒会長連合がデモ行進してます！！」

なんのために・・・

R e - d a y 7 波乱の臨時補習（後書き）

最近憂鬱なヨウです・・・誰一人としてオレを楽しんでくれません。
苦悩と翻弄の毎日です。次回はある大戦が始まります。オレが原因
みたいです・・・もうオレをほっといてくれよ・・・

R e - d a y 8 悩み多き生徒会長（前書き）

ちよつと早いですが、ペースをあわせるために更新しました

Re - day 8 悩み多き生徒会長

憎きモテモテ会長に裁きをー！！

チヨコ独占者に愛の裁きをー！！

オレたちの年金どーなるんだニッポンー！！

何やってんだこいつら

「臨時リポーターのネロです！今、私は学園の屋上にいます！」

そしておまえはいつリポーターになった

「みてくださいこのデモ行進の高いクオリティ！！他を寄せ付けません！」

デモ行進のクオリティってなんだよ

高めんなよあぶねえな

つか寄せ付ける相手がいねえって競うほど流行ってんのかよデモって

「あ、一人の生徒がウーターボーイズみたいにやぐらの上で旗を掲げています！」

やってること危険この上ねえよ

の前に地上でやったらウオ。ターボーイズじゃねえよ

「旗には・・・『男の夢を帰せ』と書いてあります。男の夢とは・・・
下心ですかね」

おまえのもってる異性イメージ最悪だな

「な、何か始まりましたよ!」

もうすでに大事件が始まってるよ

「貴崎を討てー!!!」

『蒼き清浄なる世界の為に!!!』

ブル。コスモス!?

・・・なんでオレを殺して世界が清浄になるんだよ
本当になるなら尊い犠牲になってやってもかまわんわボケ

「生徒会長! ! ！どうするんですかこの騒ぎ! ! ！男性教師もいるこの
男子下心革命をとめるにはどうすれば! ?」

ならそのネーミングセンスはどうすればいいんだ?

「オレにふるな。てかこれ中継つながってるの?」

「もちです!」

「じゃあこの場を借りてあいつらに一言言わせてもらっ

「おお! 懐かしき企画『未成年の主張』ですか! ?」

古いよ

数年前に滅びたよ

「マイクくれ」

すると二秒で渡してくれる。

さすがうちの放送部。

「おーい、男子諸君、聞こえるか」

『聞こえるわボケええええ!!!』

「じゃあ一つ言わせてもらう」

『未成年の主張上等だあ!』

さて、思いつきり言わせてもらうか

「消え失せるよ小物が。毎年毎年ごちゃごちゃうるせえな・・・何事においてもオレ以下のカス集団が寝言いつてんじゃねえよ。悔しかったら喧嘩の一つでも売ってみやがれチキン共。万年未体験の体にしてやるよ。それとも何か?てめえら数でギヤアギヤア騒ぐことしかできねえんだろ?一人じゃ何もできねえくせにえらそうなこと抜かしてんじゃねえぞクズ共が。なんだ?ほんとのこといわれてトサ力きたか?上等だ・・・かかってこいや出来損ない共!!!」

・・・いいねえこの優越感。

最高だわ

「おいヨウ、いつもながらすげえ事いうな」

「おお恐い恐い。あそこに交じってなくてよかったあ」

「でも今年はヨウ君おとなしいほうじゃない」

そういつて屋上にあらわれたのは二人の男子と一人の女子。

一応一人ずつ紹介しとくか

まず左目に眼帯をしている男が『レイ・エンヴァテリア』

眼帯の理由は目にでかい傷があるからだそうだ

で、左耳にドクロのピアスしてるのが『ゼロ・ヨトウンヘイム』

ピアスは日替わりで、そのコレクシヨンは3ケタをこえる

最後に、ウェーブのかかった金髪女子が『ジャンヌ・ニーベルング』

こいつがいつぞや話した会長秘書だ。

しかし、なぜ男子の二人がオレ側についているのか、理由を説明してもらおうか。

「ん？なぜデモに入らないか？だって、オレ彼女いるもん」
「オレも」。浮気する気なんてさらさらないし」

つまり、自分らはモテないわけじゃないからデモはやらない、とのことだ。

だからって、ほかの奴ら全員なにやってんだよ・・・
来週テストなのに、暇な奴らだな

「なあヨウ。今年はお前、いくらチョコもらえるんだろうな」

「そういやそうだな。明日はお前の日だもんな」

「あ？あれ嫌がらせだろ？毎年数百来るとか。絶対集団いじめだ」

「ははは。そんな冷たい事いふなよ。みんなお前の女になんたくて必死なんだぞ？」

「オレの女になりたい奴らがなぜ匿名でチョコを送る？そして何故超巨大チョコが宅配便のわれもの指定で送られてくる？普通クール宅急便だろうが」

明日はネロが不信がるな。

ダンボール箱にでかいチョコが送られてくるから。

あ、明日までに冷蔵庫もう一個だしとこう。

二年前は食うのが間に合わなくて大変だったからな。

「で、ヨウ君。この騒ぎどうする？」

「おお、さすが会長秘書。本題へ戻してくれるとは」

「そ、そんなことより大変ですよ？あれ、見てください。テレビ局

のへりです」

そういつてジャンヌの指すほうをみると・・・
T。Sの文字が書いてあるへりが飛んでるし・・・

「大騒動だな。でもさっきよりは静かになったぞ」

「ヨウ君がすごい事言うからですよ。さっきよりどころか、怖いほどの静寂ですよ」

「じゃあ愛惟、お前が指示して解散させろ」

「はい」

そういつてオレからマイクを受け取り、声（追い討ち）をかける

「はい、もてない男子の諸君！ひがんでないで早く帰りなさい
！」

言った瞬間、整列していたもてないレジスタンスが膝をつき倒れた。
ある意味最凶だな

「おりよ？何々？私の偉大さにひれ伏したかな？」

（偉大さじゃなくてえげつなさだな）

（ですね。酷いといしか言いようがありません）

本人に言ったら何が起こるかわからなので、小声で話すオレら。

「さあゝて、帰ろうヨウ」

「お、おう」

「じゃ、今日はこれで。また明日学校で」

はあ、やっと帰れる・・・

ておい！忘れてた！

「あ、ジャンヌ、ちょっといいか？」

「はい？」

「今晚家でメシくつてかねえ？ほら、明日は冷蔵庫空けときたいからさ」

「つたく、せっかくでかいのが二台あるのに明日にはチョコで埋まるんだもんなあ」

「なるほど、わかりました。では、お誘いにのらせていただきますね」

「ああ、助かるよ。ありがとな」

「あつれ、ヨウ、何でこういうときに私を呼んでくれないのかな？」

「なんだ？こいつ、すねてるのか？
子供だなあ」

「おまえを誘わない手はないだろう。伸縮自在のブラックホールを」
「そうなのだ」

「こいつの胃は伸縮自在で、どんな量でも適応する
だから毎年片付けには欠かせない戦力だ」

「わーい、今晚はごちそうだあ」

「ま、何作っても美味そうに食ってくれるからいいけどな」

「ねえヨウ、あの集団は何かな？」

「さあ？反乱軍の残党だろ」

そんなふうに軽く考えていたのが甘かったのかもしれない

『いたぞぉー!!』

『貴崎だぁー!!!!』

『捕まえるー!!!!!!』

『蒼き清浄なる世界の為に!!!!!!!!』

・・・戦いが、始まった

Re - day 8 悩み多き生徒会長（後書き）

蒼き清浄なる世界の為に狙われているヨウです。次はオレと反乱軍との戦いが始まります。独りぼっちの戦争、まさに『ラ。ボー』です。え？やる気無いように聞こえるもとい読める？すまん。こちらには命がかかっているのだ。仕方なからう。では、そろそろ逃げさせてもらう。『死神のKISS』『夢魔との生活』ともに、感想・評価をいただけると有り難い。それじゃ、さらばだ・・・

R e - d a y 9 第一次男子下心大戦勃発（前書き）

更新遅れてすみません！今日から週一回更新復活させますので許してください

Re - day9 第一次男子下心大戦勃発

はあっ、はあっ、はあっ・・・
くそ、どうなってやがる

「いたぞー貴崎だあ！！殺せ！！！」
『蒼き清浄なる世界のために！！！！』

弾はあと五発・・・

あいつらのチヨコへの執念は計り知れず、オレの特製違法改造麻醉銃でも一発じゃ無理・・・

残る相手は・・・四人

銃じゃ足りない

ナイフは・・・手加減できねえ
どうする・・・

「見いつけた・・・死ね」

くく大戦発動前くく

「なんだ？残党がまだ残ってたか？」

甘く見てた・・・

最初は残党が騒いでるだけかと思ってたら・・・

「貴崎だあ！！！！」

「殺せ！！！！」

『蒼き清浄なる世界のために！！！！！！！！』

とか言って何やらいかがわしい凶器を振り回してオレを追ってきやがった

とりあえず女子組にはネロがいるから平気だと考え、オレはひとまず逃げることにした

「ネロ！力を使ってもかまわん！女子組を非難させろ！流れ弾当たったら困る！」

「は、はい！皆さん早くこちらへ」

そういつてみんなを先導する

その間オレは・・・どうしよっかな

「おまえらオレとやりあうつもりか・・・」

『だったらどうしたあ！！！！』

「おまえらがその気なら・・・消し飛べ！！！」

そういつてオレは手にもっていたスイッチを押し・・・

大爆発！

とりあえず今日をしのげばおとなしくなるのは去年の経験でわかっている

だったら一日気絶しててもらう！

つもりだったが・・・

「この程度で負けるなあ！！！」

「貴崎を討てえ！！！！」

『蒼き（以下略）！！！！』

なんとまあ・・・

校長許可のもと設置した特製地雷が効かないなんて

「人海戦術だあ!!」

『かかれえゝ!!!!』

「ならば」

次の手段は・・・あれだな
まずは一旦退くか

「にげたぞおゝ!!」

『逃がすなあ!!』

・・・そしてここは生徒会会議室もといオレのホーム
アウェイに自信ないわけじゃないんだが仕方あるまい・・・
隠してある銃火器を有りつたけ装備
一応これも全部麻酔銃だから安心
ま、違法改造してあるから三日はお休みなさいの代物だけどな

「ヨウ様、ネロです」

そういつてカードキーで入ってきたネロは、すぐにオペレーターの
席に着く

いつもなら愛惟なんだが、念のため愛惟には家を任せてある

「教えたとおりにやればいい」

「はいっ!!」

なんかこいつ楽しそうだな・・・

「ヘマすんなよ、ネロ」

「了解っ!!」

そういつて敬礼するネロは真面目な顔になってディスプレイと向き合う・・・

(へますんなよ、ヨウ・・・)

いつもあいつと組んでるときは同じ事をオレが言われてたな・・・

「ヨウ様、敵影数十、距離三十」

「了解、いつてくる」

「ヨウ様、出撃・・・どうぞ！」

「・・・影の殺戮者、シャドウ・ジエノサイダーいつてくる」

任務のときはいつも言わされている、名言パクリだがここで名乗るのは・・・真名ではない
異名・・・オレら特殊部隊で使うコードネームを名乗る理由は・・・まあ上司のガン。ムオタクのせいだ

『いたぞー!!』

「やつちまえー!!!!」

そういつてオレに向かってくるが・・・

ただの人間が、銃火器を持った影に敵うはずない

「き、消えたぞー!!」

「どこいきやがった!!!!」

『・・・ここだよ・・・』

ヒュンツ・・・

静寂。

銃は無音改造してあるので、銃声はない

あいつらは襲われるという事実を、目覚めてから知るだろう
そうなるはず・・・だったのに

「な、なんだこれは・・・か、体が・・・」

「なんの・・・これしき！！！！」「効くかあ！！！！！」

麻酔効きませんでした・・・

とはいっても、体に異常が残る様子・・・それでも動ける執念って
怖ええ

一発で効かないなら・・・

「ブツ倒れるまでブチ込むだけだな」
『は？』

オレの台詞の意味、わかってないみたい
まあわかってほしくもない独り言だけだな

・・・刹那

所詮は人間、三発打てば十分だった

「ネロ、次は？」

「近い順に・・・音楽室に数三十、職員室に教師含め二十、予備の
教室に二十五います」

教師込みつて・・・

「じゃあその順番に殲滅する」

「了解。あ、ヨウ様！狙撃班がいます！位置は・・・向かいの棟屋
上です」

「了解した、ならそつちが先だ。一度戻る。狙撃には狙撃だ」
「わかりました」

通信をきり、屍を超えていくオレ

途中十人ほどのゾンビに女性の先生が追われていたのを見つけ、迎撃して非難させた

「ネロ、変化は？」「先ほどの狙撃班が、屋上から撤退してC棟三階の教室に移動しました。おそらく、テレビに映ってヨウ様にばれるのを恐れたのでしょう」

「了解。なら一番高いB棟から狙う。数は？」

「武装した狙撃担当が十、通信・見張り担当に五です」

「わかった。それと、あいつらはオレの麻酔でも一発じゃ効かないから気をつける」

「あの弾が効かないって・・・ハウスオ。ザデッドですか？」

ハウスオブ。デッドとは、わかりやすく説明するとゲーセンにあるゾンビを撃ち殺すゲームだ

モテない奴らをゾンビ扱いしてんだろ
さっきオレも思った

「ああ、そう考えていいだろう」

「わ、わかりました」

「じゃ、こいつで行ってくる」

「お気をつけて」

オレはお気に入りの愛銃ライフルを携え、B棟へ向かう

ついでにここで説明しておこう

この学園はAからDの四つの校舎がある

で、順番に説明すると・・・

A棟↓校庭を中心に北にある。一階はなく、二階と両脇の棟が門みたいに見えるから外の正門とは別に『大門』と言われている

B棟↓西にある棟で、他の棟が六階なのに対してこの棟だけは職員室と各教室があるから九階までである

授業中はかなりの数の生徒がいることになるので昼間の防犯対策は完璧で『要塞』と呼ばれている

C棟↓この棟に『生徒会会議室』、そして極秘裏にオレが作った『司令室』がある。これは今ネロがいる部屋で、ここに入れる人間はかなり限られている

D棟↓主に部室が占める棟で、たまに窓から悲鳴や煙が上がる、学園七不思議の半分がここにあるといわれる

そーこーしてるうちに、オレはB棟屋上に着いた
ドアを塞ぎ、後ろから襲撃されないようにしておく

「ネロ、指定ポイントまでついた」

「了解・・・ターゲットの位置をリーダーに表示します」

今更だが、オレはドラゴンボ。ルのアレみたいなやつを着けていて、ネロから送られてくる情報がこれに表示される

熱源反応・・・情報通り

「ターゲット確認。これより殲滅開始する」

「了解」

ライフルを覗き、狙いを定める

まずは銃持つてる奴等を・・・潰す

「ん？貴崎のやつ、どこに行った？」

「見失ったらさっさと探・・・」

「おい、どうし・・・た」

おー、流石に超強化麻醉弾は効くみたいだな

バタバタ倒れていく敵を見届け、オレは司令室に戻る

「狙撃班、殲滅完了」

「了解。次は音楽室Aにまわってください」

「はいはい。それと、例のアレ」

返答しつつ、オレは両手じゃないと持てない位大きめな銃を十丁、用意させる

「そんなに持てるんですか？」

「無理」

「じゃあなんで・・・」

「こつするのさ」

オレが指をならすと、全ての銃が浮いた
否、持ち上げられた

「おりよ？なんですこれ？」

「影だ」

「影？」

「オレの能力だ。」

「どういう事ですか？」

「オレは力を使って影を自由自在に操れる」

オレはこの能力で現在の大佐という地位まで上り詰めたのだ

「これは・・・ドラグ。ン・システムですか？」

「そのとおり！」

「ザ。トの超エースですよね」

「まあな」

そんな話をしていると・・・

『出えてこい貴崎く！！！！』

「お呼びですね」

「・・・行ってくる」

オレは影を従え、お呼びだししてくれやがった奴の所へいく途中待ち伏せされたがドラグ。ン・システムで迎撃

「来やがったな」

「あんたが呼んだんだろ」

「・・・るせえ！その首、今日こそもらっぞ」

「殺ってみな」

そうオレが言うと、敵は一瞬で間合いを詰めてきた

相手の武器は刃物なので近づきたくない

それに、オレのドラグ。ンは遠距離仕様という事ではないが下手すれば流れ弾がオレにくる

「死ね」

そういつて刃物を振り回しているが、実際口先だけで、弱い

「口先だけか」

「んだとお！！！」

「そろそろ飽きたな。お前と遊ぶの」

「なら、オレの本気を・・・」

そういつてスピードを上げるが・・・

遅いことに、かわりはない

「遅い」

「ああ！？」

「終わりだ」

いくら早かろうが所詮は人間

オレに捕らえられないはずがない

ドドドドドドドドツ！！！！

集中砲火をまともに受ける

まるで動揺した隙をストラ。クフリ。ダムにやられたレジ。ンドの
ように・・・

「何故、何故オレの速さが・・・」

「いくら速かろうがお前の影を追えばなんら問題ない」

「か・・・げ・・・」

オレは影を操る

その影を見極めることくらい簡単だ

影のない世界なんてあり得ない

だからオレの能力は最強なのだ

すなわち、オレが追い付けない程速いかオレの攻撃が効かないくらい丈夫でないとオレには勝てない

オレがコメディらしくない解説をしていた、その時・・・

「見つけたぜえ貴崎」

「なんだ、あいつやられてんじゃねえか」

「やっぱ速いだけじゃなあ」

「頭使わないと」

「これだから馬鹿は困る」

えっと・・・何レンジャーだこいつら

お決まりの赤含む五色の・・・

Re - day 9 第一次男子下心大戦勃発（後書き）

ごめんなさい。ヨウです。ケータイ替えて書きづらい+長い塾+疲労から来るスランプ+更新できない、となっていました・・・

学校が始まって少しは作者にフリーダムが訪れると思うので、これからも『死神のKISS』『夢魔との生活』をよろしくお願いします

R e - d a y 1 0 物事はそううまくいかない（前書き）

少し短くしました

Re-day10 物事はそううまくいかない

現れたのは五人

だが、逆光で顔がわからない

「俺達と勝負しろ！」

逃げてでも追ってくるだろ

「いざ、尋常に勝負！」

大勢で一人を狙って何が尋常なんだ

「まずはイエロー、いけえ！」

「了解した」

そう言っただけイエローと呼ばれた男子はまえにでた
ても、一つ問題が・・・

「オマエら、誰が何色か分かんのだが」

「何を言っかつ！これを見よ！」

そう言っただけにメガネのいちを直す

「もしかして・・・メガネのフレーム？」

「今更気付いたか愚か者め！」

分かるかよ！

逆光で見えないんだよ！

「フハハハハハ、早速死ねえ貴崎いゝ!!」
「笑い方古っ!」

ツツコミを入れつつ、飛んできた何かを避ける
何飛ばしてんだ?

「ちっ、外したか・・・サソリの毒でつくった特製マシンガンを・・・」

マジで殺る気や・・・

「オラオラオラゝ!!」

当たったらじょーだん抜きで危ないな
っーか・・・

「ちっ、当たらねえな。じゃあ次は・・・こいつだ!」

次々とどっから出してんの!
ドラ。もんか?

あ、ちなみに伏せた部分はカタカナかひらがなかで迷ったから伏せた訳じゃないぞ

「フハハハハハ、これでどうだ!特製催眠ガス!こっちが風上なん
でな、喰らえ!!」

お、なかなかやるなこいつ
でも甘いな

「・・・フハハハハハ!馬鹿め、ともに食らって平気でいられる

わけ・・・え？」

「悪いな、毒物とかの薬は効かない体質なんだ」

極めて奇っ怪な生まれ方をしたオレは、普通の人間向けの薬物は効かない

「じゃあなんでさっきのサソリの毒を避けた？」

「いや、毒は痛く無くとも弾が当たったこと自体痛いじゃないか」

「針がチクツと来るだけだろ！小学生でも耐えるわ！」

いや、いくら細い針でも速けりやいたそうじゃん

「うるさいやつだな。そろそろくたばれ」

オレは背中から愛用するナイフを・・・と言いたところだが、使ったらマジで死ぬからやめとく
変わりに、改造麻醉銃を大量に用意する

「そんなでかくて重そうな銃をそんなにたくさんどうするつもりだ？」

「黙ってみてな。生きてればだけど」

「なんだと！！」

妙に古くさいセリフを尻目に、オレは銃をすべて宙に投げる

「フハハハハ、馬鹿め、銃を捨ててどうするつもりだ？」

「だまってると言ったはずだ」

オレは影で銃を拾い、ドラグ。ンを展開する

生憎夕方に差し掛かる時間なので日は低く、校庭は影で真っ暗に近い

つまり、オレの能力は最大とまでは行かないが、七割暗いまで発揮できる

「な、なにに！」

「堕ちな」

オレは影で足場を作り、無重力に似た動きを可能にする

「ま、負けて・・・たまるかあ！！！」

イエローも銃で応戦するが、オレの速さの前では敵ではない

「く、ここまで・・・か」

無惨に被弾し、倒れるイエロー

そんなものはまるでなかったかのように次が出てきた

「なんだそれは？面白そうだ、欲しいな」
「げ・・・」

現れたのは、一応クラスメート
・・・あれ？

こいつメガネかけてたっけ？

「おいたー坊、お前メガネだったか？」

「いや、伊達だけど？」

「何故に！」

「まあ、雇われメガネ」

「珍しいわ！」

「そうか？珍しいどころか異例だと思うが」

自覚アリですか

「なんで？」

「オレ家が家だから親の決めた婚約者いるじゃん」

その話は知ってる

親の決めた結婚なんか嫌だ、と悩んで暴れてたが、実際会った翌日にコイツは『もろ好みだった・・・』などといってケロつと学校きやがった

「悩み過ぎて壊れてたな」

「・・・ともかく、そーユ一事情でチヨコなんか貰わんでもよかったんだ」

「じゃあなんで？」

「お前だけモテてるの悔しくないのか！と力説されてな。進級までの一ヶ月半オレに三人パシリを寄越すって言うからさ」

校内で人身売買事件！？

「人身売買には近いけどまあ良いかなっと思ったから今回ブルーとして参加」

自覚アリですか（再）

「てか、ブルーって赤の次じゃない？他の色はどうした」

「ピンクとグリーンが高所恐怖症でな。屋上からお前とイエローが戦ってるの見てる途中でダウンした」

弱っ！

チヨコのためにもうちよい頑張れよ！

「大丈夫、レッドは無事だから」

「まあそれはともかく、お前はパシリ獲得のためにオレとやりあう
つてのか？」

「そ」

・・・一文字であっさり認めやがった

「だから、いざ勝負・・・」

「お坊つちゃまあああー！！！！！」

「お？なんだ、太郎か。なんだ？」

「お、お嬢様がお呼びです・・・明日のパーティーでの事で打ち合
わせしたいと」

「わかった。あいつに呼び出されたんならショーがない。じゃ、お
先に」

そう言つて帰った

ホントに帰った・・・

なら今のところ

イエロー↓完敗

ピンク↓高所恐怖症

グリーン↓高所恐怖症

ブルー↓妻の呼び出し

どんな戦績だ！

「おいレッド、どーすんだあんた。みんないないぞ。ロンリーだ

ぞ。一匹狼だぞ。独りぼっちだぞ。劇団ひとりだぞ」

「なんだと貴様ああああ！！！！だれが劇団ひとりじゃああああ！！！！」

そこかよ

Re-day10 物事はそううまくいかない(後書き)

第十話、読んでもらえてうれしいです。『夢魔との生活』がついに二桁に達しました！ありがとうございます！これからも『死神のKISS』『夢魔との生活』ともに宜しく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0832c/>

夢魔との生活

2010年10月21日05時30分発行